2013年8月9日

木の根夢村
The Experimental Village:
An approch To Global Problem
Based on Agrarian Values
地球的課題の実験村

第57号

HYAKUSHO-HYAKUSHO. HYAKUSHO-HYAKUSHO.

百姓百生　その５１

佐倉「結び合い農園」で二人三脚

丹上（たんじょう）　徹さん

HYAKUSHO-HYAKUSHO. HYAKUSHO-HYAKUSHO.

ガッシリした体格に眼光鋭いイケメン、それが丹上徹さんです。彼は２０１１年の１２月末から２０１３年の９月末まで木の根ペンションに住んでいました。木の根ペンションの薪ストーブ用の木を運んだときや、木の根ペンションでのお祭りイベントの準備・後片付けのときにはその体格から生み出されるパワーでずいぶんと助けてもらいました。

丹上さんは１９８６（昭和６１）年生まれの２７歳です。実家は千葉県内で牛・野菜・ブルーベリーなどを生産する農家です。大学卒業後、アメリカで農業研修をして帰国してしばらくは実家の手伝いをしていました。しかし、自身の技術不足を感じていたこと、実家とソリがあわなかったことから実家を飛び出し、香取市と山武市の農家さんのところで農業研修をはじめました。研修が終わったあと佐倉市で畑を借り、研修時代に知り合った柳原亜衣さんと一緒に「結び合い農園」として農業を営んでいます。

丹上さんは自分たちのつくった野菜を直接お客さんに届けたいと考えています。これが佐倉市を就農先として選んだ理由でもあります。というのも、佐倉市は街にも近くお客さんとも比較的近い距離にあります。そのわりには畑も多い。お客さんとの交流や関係づくりをしやすい、というわけです。丹上さんの販売先は直売がほとんどです。飛び込み営業をしてパン屋さんや魚屋さん、スポーツジムなど、売り先を開拓してきました。いまはホームページを準備もしています。他に、ユーカリが丘駅南口にある「石窯パン工房パリス」というところで毎週日曜日に店頭販売をしています。

自分たちで農園を営むようになって感じていることは、研修をへて農業のやりかたについてわかったつもりだったけれど実際やってみるとそうでもなかったということです。逆に研修時代にやったことでこんなに役に立つとは思わなかったことは「一日中やらされた草取り」だそうです。あれにくらべればこのくらいの作業はラクショーだぜ！と思えるそうです。

今後の抱負としては、まずは農業で生活できるように継続していくことです。そのさきは、地域をもっともりあげていきたいと考えています。佐倉市でもやはり農家と畑は減少傾向にあるそうで、それにともない、文化やつながりもなくなりつつあります。丹上さんとしては、農業をやる仲間をもっと増やして地域の文化やつながりを保持しつつさらにもりあげ、地域での自給率を上げて地域や地域のコミュニティがもっと風土に根ざしたものになるように貢献していきたいとその想いを語ってくれました。（金森史郎）

８・２４　陸の孤島ライブ ｉｎ 木の根
「共同体の無い祭」を考える

成田市東峰　実験村村民　樋ケ守男

６月２３日、炎天下の午後、木の根ペンションで祭の準備に汗を流す。敷地の草刈り、木の枝切り。そして、メイン会場となるプールの掃除。この２年でたまった落ち葉や泥水を集めて外へ出し、壁や床を洗う。水の中でも、とんぼのやごやおたまじゃくしがたくさんいる。

昨年８月２５日、おひさま発電所の完成祝いで「原発の電気にたよらない木の根夏祭」を開催した。そのコンセプトを生かし、かつ「若い人たちが中心になって」と、４月に今年の企画がスタートした。

いま集う１０数人のスタッフは、６０代の私と４０代の連れ合いをのぞけば、みんな２０、３０代。企画は音楽と踊り中心のイベントとなった。ロック、フォーク、ジャズ、アニメソングやゲーム音楽に盆踊り。多種多彩な出演陣がそろい、クールダウン用には有機農業フィルム上映。その名も『陸の孤島ライブ ｉｎ木の根』。主催者は『島民たち』である。

島はどこに？　島民が住んでいるの？

江戸時代、広大な軍馬の放牧地だった下総台地（約１９００平方ｋｍ）は、明治以後次々に開墾され、畑や住宅地となった。その一角、成田富里の４８００ヘクタールは天皇家の御料牧場となり、そこの入植開拓は終戦後のこととなる。

が、三里塚地区で粒粒辛苦の開拓に成功してできたいくつもの集落が、１９６６年夏、突然、新東京国際空港用地とされ、コンクリートの下に消された。３０年を越す空港との激闘の末、５０数軒すべての農家が移転した木の根に、ペンションの土地と建物だけが残った。

それから１３年、ペンションは実験村など三里塚に集う人々の活動・交流拠点の一方、周辺有機農業「研修生」たちの安い寄宿先でもあった。その数も１０人近く。一昨年２０年ぶりに木の根プールを復活させ今回「祭」の代表をつとめる大森さんや、出演者のひとり「東京ジャズシンジケート」の川崎さんもここに住んでいた。

Ｇ８の首脳会議が北海道で開かれた２００８年夏、Ｇ８に反対する若者たちが昼の２時から翌朝の４時までロックコンサートをペンションで開いた。昼でも夜でも、どんな音も周辺住民に迷惑はかからない。狭い敷地が解放感いっぱいの空間と化した。そして、おととしのプール開き、去年の夏祭り。ここで演奏した若者たちは、異口同音に「またここでやりたい」と言い、東京のロッカーたちが今年は最初からスタッフにいる。また、そんなイベントで初めて訪れ、他所ではお目にかかれない空港ど真ん中の風景に魅かれた宿泊客も、「島民たち」に名乗りをあげた。

ここには、通常祭の主体となる集落も神社仏閣もない。「島民たち」は同じグループでもなければ「空港反対派」でもない。賛成とまで言わなくとも、若者たちには成田空港があることやそれを使うことは「当たり前」のことである。が、それぞれが人生のある瞬間、木の根という場に出会い、一所に祭をやろうと、また集まっている。

失われた祭や村が集まっていた

昨年の夏祭、最後は盆踊り。頭上には「東峰区」と書かれたちょうちんが並ぶ。１曲目は「東京音頭」。参加者のほとんどが初めて出会う盆踊り、連れ合いと私で振りをやってみせてから曲が始まる。テープは木の根の隣、横堀の盆踊りで使用されていたものを借りた。横堀の盆踊りは２００６年に最後の農家が移転し、今は無い。２曲目は、「銚子大漁節」、演奏は１９９７年東峰盆踊りのＤＶＤだ。『シーサーズ』が歌い、踊りの中には移転で去った人たちも多い。東峰も、２００２年集落の北側に滑走路が開業、お祭り広場だった場所は進入灯に変り、盆踊りができなくなった。

演奏は大漁節から沖縄のカチャーシーへとなだれ込む。みんな踊っている。ロックの若者達

も年寄りも、一体となって盛り上がる。集落が無くなり、ペンションだけが残った木の根。そこに空港建設で失われた村や人々の営みが寄り集まり、若いエネルギーと一緒に星空に噴きあがっていた。

「ゼロに飛び込む」という話合い解決

「百を半分に、それをまた半分にと、いくらやっても永遠にゼロにはならない。残ったごくわずかに、元の百にあった問題が凝縮するだけだ。ゼロはプラス百とマイナス百、＋１０ｘと－１０ｘが一緒にゼロに飛び込むことでしか生まれない。そうすれば、未来へのエネルギーに満ちた平和な場ができる」

「成田空港問題を話合いで解決する」というときの私の持論である。それからすれば、空港総面積１１００ヘクタールのうちの約１０００平方メートル、１万１千分の１の木の根ペンション一点に、空港建設で失われた村々の盆踊りが集まったのは当然なことだった。しかも、予想や願望とは違い、村のない所に、やぐらもなく、大半が村とも盆踊りとも無縁なはずの人々の中で蘇ったのだった。

孤島は世界に通じ、世界に開かれている

今回の「祭」を案内するチラシ裏面の写真を見れば、誘導路や飛行機に囲まれた木の根はまさに「陸の孤島」である。しかし、孤島が自らを閉ざすことなく、その絶海におのれを開けば、空港用に造られた鉄道や道路で首都東京はおろか、世界各地とつながり行き来できる。「空港」しか知らない人々も一度訪れれば、孤島の姿に驚き、「なぜここにこんなものが残っているのか」と心に留める。

また、この孤島はこの島の下はもちろん波の下にも生きた土がつながっている。戦後開拓でできた木の根の地番は、今も空港敷地内に残り、前の成田空港会社本社ビルも地番は「成田市木の根字神台」だったと聞く。長く馬たちが肥やし、開拓者たちがその生命を吹き込んだ木の根の土地は、「今も空港のど真ん中」に生きている。

人間の生命が蓄積された土地の祭

みんなで金を出し合い、ペンションに設置したお日さま発電所から始まり、様々な自然エネルギーの可能性を考えるにつけ、人間は自分たちの食べ物もエネルギーも作れないと改めて実感する。地球上の生き物たちは消費者でありかつ生産者である。その生命活動で、自分だけでなく他の生き物の食べ物やエネルギーを作る。また土や化石燃料・資源として蓄積してくれている。しかし現代文明のもとでは、人はほとんど消費者としてだけ存在し、そのことが生命系としての地球を危うくしている。

そのことを深く考えれば、人間が人間のためだけの仕事をするのではなく、人間が他の生き物の働きを手助けする仕事を増やすことができれば、人間が生き続けていくことができるということだ。例えば土や森、川や海といった、他の生き物たちが生きてゆく場を豊かにしていくことを、生き物としての人間の仕事にできれば、人間の生命の営みは未来へと蓄積できる。

共同体の無い木の根の祭は、人間だけでなく、そこにつながり過去から未来へと生きとし生けるものすべてが作る、土地の祭である。それらが時空を越えて出会い、一所に楽しんで、生きるエネルギーを得て、また次の生命の営みを生む。

昨年、テープとＤＶＤだった盆踊りの演奏を、今年は自分たちでと、お囃子のグループが練習を重ねている。「東京音頭」の歌詞が「♪踊りおどるならチョイトおひさま音頭♪」と歌い出し、５番までの「木の根おひさま音頭」となった。その３番は「♪江戸は佐倉牧、ちょいと明治で御料、戦後開拓、今も空港のど真ん中♪」。そこの掛け声は「♪ペンションと飛行機、隣合って隣あって♪」である。

昼から夜まで、お日さま電気と竹とうろう、盆ちょうちんの夏祭。ぜひおいで下さい。そして一所に楽しんで下さい。

次ページの写真は空港に囲まれた「陸の孤島」木の根ペンション。ここでこれまでさまざまの催しを開いてきた。

JAL

2011.7.17
復活!!
たの根 プール開き

三里塚に学びたい－３・１１から三年目で思うこと

西沢江美子（村民・福島「農と食」再生ネット代表）

福島・三春町芹沢農産加工グループの人たちは、三度目の収穫祭（実験村もカンパやバスツアーなどで協力している）の準備で忙しい。三年目の３・１１。突然襲いかかった原発事故に放射能汚染。田畑に出ることも、耕し種をまくことさえ禁止された福島の農民たち。表現できない苦悩、怒り、悲しみを福島の人たちと最も深く共有できたのが、三里塚の農民のはずだ。

この国が「銭」をなによりも優先し、そのためには生命さえも切り捨てて巨大開発・環境破壊を進めてきた歴史と現実がある。切り捨てられた代表が三里塚だからだ。巨大開発が生命も人権も軽視することを早くから警告し、生命を大切にする百姓を守り通す闘いをつづけてきた。「三里塚」という名に芹沢農産加工グループの人たちはひきつけられる。

今年４月２８日、三度目の滝桜花見ツアーは、東京からバス１台と岩手、山形、宮城、遠くは広島などから駆けつけ人たち含めて約８０人が集結した。時間的にも経済的にも大変な人たちが、「福島のことを自分のこととしたい」ときてくれたのだ。三春町の鈴木義孝町長とＪＡたむらの佐久間浩幸営農経済部長から町とＪＡの３・１１以後の取り組みや補償問題をめぐる苦労と困難、これからの方向などを聞き、続いて三グループに分かれて交流会を開いた。

福島現地の女性からは、「すべてのものを測って（放射能を）自分も食べ、直売所に出す。これが日常となっている」という言葉が出る。ありえない非日常、異常が日常となり、それに慣らされていることの怖さが、ポツリと語られる。参加者の多くは、その言葉に新たなショックを受けたという。

「言葉を出し合うためにも、続きは秋の収穫祭で」と宮城からの参加者が呼び掛け、次の出会いを秋に引き継ぐ。

◆滝桜を三里塚に

福島「農と食」再生ネットから実験村に三春の滝桜（写真）の苗木５本を贈った。「夕立の森」「木の根ペンション」「ワンパック研修所」「東峰の小公園」に植えられた。生命軽視の国策と闘い、人権を守るために生き抜いた人々の闘いの証しとして、桜の連帯を願って。

国際有機農業映画祭　　土くれを握りしめて　－命どう宝、有機農業の世界へ－

実験村には毎回協賛いただいている国際有機農業映画祭は今年第７回を迎え、１１月２２日（金）から２４日（日）にかけ開催します。本番は２４日です。場所は、法政大学市ヶ谷キャンパスの外濠校舎「さったホール」。映画祭は法政大学沖縄文化研究所との共催で行います。

２２日午後３時から同研究所による公開講座で始まり、２３日は午後２時開会で、沖縄の土地闘争の原点伊江島の農民のたたかいを記録した映像と、原発を追って六ヶ所村と福島の農漁民の声を記録した「未来への伝言」を上映。そのあと「沖縄と福島に向き合う」とテーマに、現地から来ていただき、お話いただきます。

２４日は、映画祭本番で、午前１０時から夕方５時まで、有機農業、遺伝子組み換え、農薬、生物多様性、土地収奪などをを取り上げた映像を上映します。参加費は２２日は無料、２３・２４日は通して前売り１８００円、当日２５００円。学生は１０００円。

お問い合せは大野和興まで。（電話・０９０－４１７５－４９６７、korural@gmail.com）

東峰島村さんの畑に航空機落下物
キャセイのボーイング７７７と判明

ボーイング７７７の部品が東峰の島村さんの畑に落下した。実験村村民で航空機の専門家でもある杉本茂樹さんらの鑑定結果とも一致、落とし主のキャセイ航空現地責任者が謝罪、落とした部品を原因究明のためと持ち帰った。空港会社もキャセイも地元からの連絡があるまで部品が落下したことに気づかなかったらしい。以下経過を報告する。

（東峰在住　樋ケ守男）

島村さんの家はＢ滑走路南端から約４００メートルの所にあり、着陸機は頭上４０メートルを通り過ぎる。７月１６日夕方６時過ぎ、島村さんの次男が、家の前に広がる畑に枝豆の収穫に行き、南側の「寄せ」の栗の木のそばで白い楕円形物体を発見した。

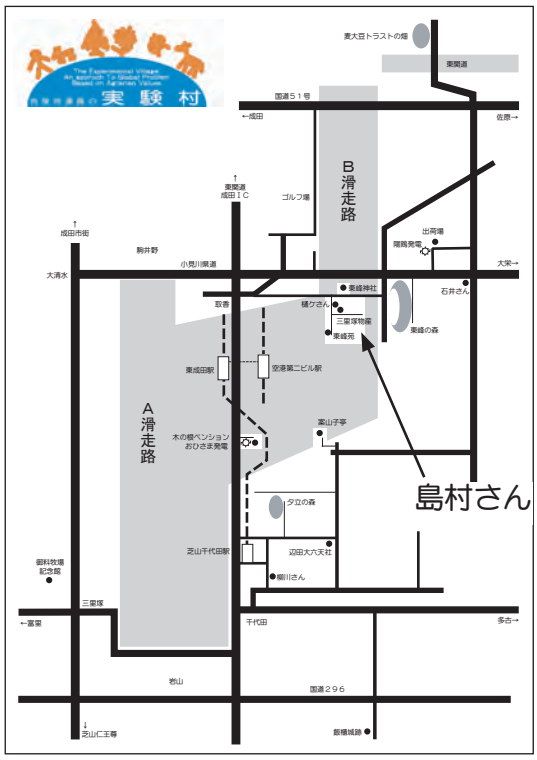
１７日夕刻、やはり「航空機の落下物らしい」ということで、島村さんは、成田市空港対策課と成田国際空港株式会社（ＮＡＡ）、集落各戸に連絡。１８日朝９時に島村さんが会見して説明。空港側は国交省の空港事務所職員も同行していた。

物体はかなり大きく縦８０ｃｍ、横２０㎝、深さ１０㎝の長楕円深皿形で、重さは１．８ｋｇ。材質はプラスチックや炭素繊維のようなものか。表は光沢があり、裏は黒く、ゴムのクッションでふちどられている。片側に一ヵ所ある取り付け部の所が折れ、接続部のビスもとれている。

着陸後、落下物があることが目視発見された時は、ただちに滑走路を閉鎖して捜索するという。が、この日までそうした報告はないという。写真をとって持ち帰り、海外も含め各航空会社に問い合わせるなど、調査することとした。

１７日、深夜、樋ケが元日航労組の実験村村民杉本さんに連絡、相談。１８日の会見後、写真を送り、杉本さんが現役の友人らに問い合わせ調査していただくことになった。

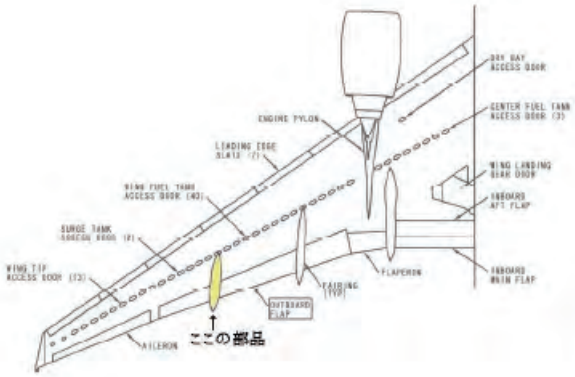
２３日、空港会社がきて、裏側の油をふきとり、シリアルナンバーらしきものが出てきた。中央部に〝ＳＰＡＲＥ　Ｓ〟下段に〝１１３Ｗ　９５１１－１　Ｓ／Ｎ　３４６〟とあった。その写真を杉本さんに送る。報道からは、ボーイング７７７の部品らしいと連絡があったが、ＮＡＡからは、何の連絡もない。２５日、杉本さんから連絡。ボーイング７７７の翼端にある高揚力装置（フラップ）の一枚とのこと。島村さんに連絡。２６日夕刻、ＮＡＡから島村さんに、「１５日に香港から着陸したキャセイ航空の部品と判明した」との連絡あり。後日、集落への説明も含めて行うとのことだった。

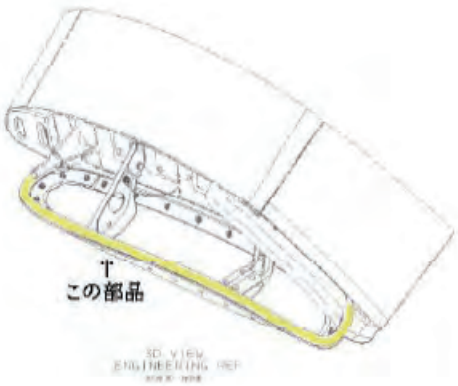


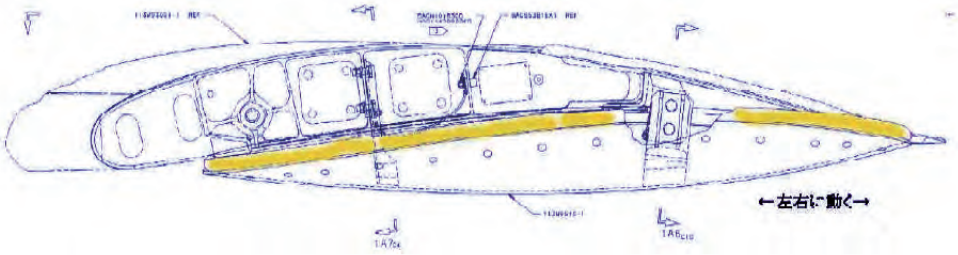
７月２９日、杉本さんより、部品イラストが送られてきた（次ページ）。「Ｂ７７７左主翼後縁に装着されている外側寄りのフラップに装着されているフェアリング（空気抵抗を軽減するための覆い）」であることが、一目でわかる。杉本さんに感謝。

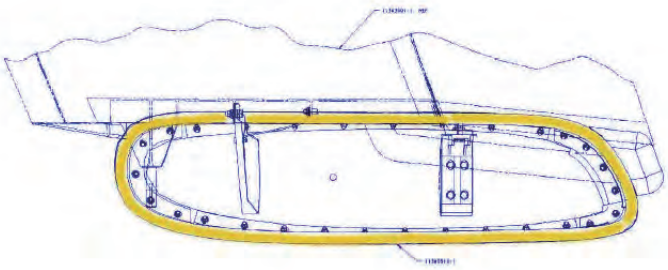
キャセイ航空の現地責任者がＮＡＡと同行謝罪し、「破損原因調査」のため、落下物を回収していったことを後で聞く。

Ｂ７７７の主翼後縁に取り付けられている外側寄りのフラップ（高揚力装置）に装着されている
フェアリング（空気抵抗を軽減するための覆い）のイラスト









年次寄い合い報告

６月３０日（日）、４月に暴風雨で延期された年次寄り合いが、夕立の森で開催された。１２名が参加し、前年度活動の報告、今年度の計画が承認された。

昨年度から出されていた新事務局長人選については、来年度から佐々木希一さんが担当し、今年度は大野和興さんが兼務することとなった。

今後の実験村についても議論があり、「実験村の何をどう引き継いでもらうのか？」という投げかけには、以下のような意見が出された。「引き継ぐ相手と一緒に考えていくべき」、「自分が自然死する時に、実験村も自然死する」、「自分たちの思いをひきついで若い人が農業をやるわけではない。実験村も同じで、自分は死ぬまでやるが、若い人が何かをひきつげばいいけど、なければ自然死というのもいい」。

また、「実験村は『場』」という発言もあり、それについて、「思想的なものは引き継げない。」、「『場』があると、そこから広がっていく。エネルギーの活動も一度はなくなったが、『場』があったから現在の太陽光発電の活動が生まれてきた」、「今は『場』が求められているけれど『場』がないから実験村はあっていい。自然死のあとは芽が出てくる。思想は自然に生まれてくるはずだからそれでいい」、「確かに、『場』があるから人が来たかもしれないが、『児孫のために自由を律する』の思想がなければ、実験村は意味がないかもしれないと思う」という発言が出るなど、様々な意見交換がおこなわれた。年次寄り合いで結論を出すことはせず、今後も意見を出し合っていく予定。

その後行われたスローウォークｉｎ三里塚では、東峰苑、麦大豆畑トラストの畑（昼食）を見学、陽鶏発電所・総州では、選卵室の展示資料や太陽光発電パネル、実際に目の前で動いているメーターなどを見て、実感した参加者も多かった。三里塚物産前で休憩し解散。その後、希望者が東峰神社、木の根ペンションを訪れた。

（報告：尾関葉子）

活動予定

8月10日(土) 麦大豆畑トラスト　培土・畝立
24日(土) 陸の孤島ライブ ｉｎ 木の根
9月14日(土) 麦大豆畑トラスト　草取り
21日(土) 北総大地夕立計画　山仕事
10月12日(土) 麦大豆畑トラスト　草取り
19日(土) 北総大地夕立計画　山仕事
11月 9日(土) 麦大豆畑トラスト　草取り
16日(土) 北総大地夕立計画　山仕事
22-24日 国際有機農業映画祭

～村民になってください～

実験村は、いまの社会のありようと、私たち自身のくらしを足元から問い直そうという試みです。国際空港という巨大開発に抗し続けてきた三里塚の地を拠点に、人々と結びあいながら水を、土を、森を、人を大切にする“もうひとつの里”づくりをめざします。あなたもぜひ、村民になってください。

○村民費　３０００円
○麦大豆畑トラスト　５０００円
○通信購読のみ　１０００円　※年３回

郵便振替　００１４０－３－９２５５５
地球的課題の実験村

＜問い合わせ＞
電話／FAX：０４７６（２６）１６５４ 平野
メール：jikken-mura@jcom.home.ne.jp
ＵＲＬ：http://members2.jcom.home.ne.jp/jikken-mura/

【編集後記】

東峰に落下物。しかも住民が連絡するまで空港会社も航空会社も気付かなかったというお粗末さ。相当の重量物で、当たれば生命を奪う。おりから沖縄でヘリ墜落。オスプレイ追加配備で、沖縄の人々の神経を逆なでしていた時期に重なる。参院選で圧勝した安倍自民党は早速原発再稼働とＴＰＰ交渉を加速させ、集団的自衛権解禁で動き出す。すべてが重なり合っている。８月２４日は木の根の夏祭り。祭は古来民衆の抵抗を産み出す場でもあった。（お）

■編集・発行／2013年８月９日「地球的課題の実験村」
■購読料／年間1,000円（年３回）
■５７号編集担当／大野和興・平野靖識
■共同代表／柳川秀夫　千葉県山武郡芝山町香山新田２２
大野和興　埼玉県秩父市大宮５７３４－４